

公益社団法人 日本化学療法学会 市民公開講座

企画・制作 朝日新聞社メディアビジネス局 広告特集

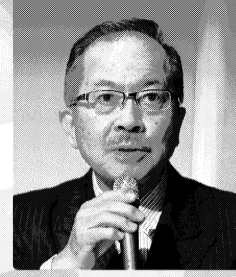
最近、抗菌薬がどれも効かない「悪夢の耐性菌」と呼ばれる菌が出現し、世界中の脅威となっています。人類の歴史は感染症との闘いであったといっても過言ではありません。多種類の抗菌薬(抗生物質)が開発され、多くの感染症は制圧できたかのように思われましたが、実は現在でも感染症との闘い、細菌との攻防は続いているのです。そのような背景から、公益社団法人日本化学療法学会主催の市民公開講座が開催されました。



2017年
12月9日開催
紙上採録

東京・築地
浜離宮朝日小ホール

司会・東北大学加齢医学研究所
感染症薬開発寄附研究部門
渡辺彰 先生



司会・東邦大学医学部微生物
感染症学講座
館田一博 先生



開会挨拶

公益社団法人日本化学療法学会理事長
東京慈恵会医科大学高師医療センター泌尿器科
清田浩 先生



これまで細菌による感染症は、多くの種類の抗菌薬(抗生物質)で治療することができてきた。しかし攻撃される細菌の一方で何とかなしき残る菌、少しずつ自分を変化(進化)させ、抗菌薬を効きにくくする耐性を獲得し始めています。そのまま耐性菌が増え続けられ、将来的に感染症に効く薬がなくなってしまう。本日は現状を共有し、どうしたら人間が感染症から生き延びられるか、一緒に考える機会になれば幸いです。

講演①

身近に存在する耐性菌

国立国際医療研究センター病院 副院長 / 国際感染症センター長 大曲貴夫 先生

現在問題になっているのが、いくつもの種類の抗菌薬に耐性を示す耐性菌です。その一つにESBL産生大腸菌があります。人は誰でも腸内に大腸菌をもっていますが、その大腸菌の中で、抗菌薬を分解するESBLという酵素を産生する機能を獲得したのがESBL産生大腸菌です。ESBL産生大腸菌自体は腸内に存在しても問題はありませんが、感染症に罹った場合、標準的な抗菌薬を使用しても効果が得られません。

- (表) 抗菌薬の適正使用
- 抗菌薬は医師の処方箋が必要で
 - 抗菌薬は医師の指示通り飲みます
 - 抗菌薬をとっておいとあて飲みません
 - 抗菌薬をあげない、もらわない
 - わからないことは医師や薬剤師に聞こう
 - 感染症を予防しよう

国立国際医療研究センター AMR臨床リファレンスセンター
インフォグラフィック vol.1
薬剤耐性 - 知ろうAMR、考えようあなたのクロー



院内感染の原因菌として耳にする事の多いMRSA*などの多剤耐性菌は、これまでは医療機関内での問題と考えられてきました。しかし、現在では家畜や環境中にも存在し、今や市中にも広がっている状況で、健康な人の体内からも検出されています。抗菌薬は、原因菌に対して適切な種類を選択し必要量投与すれば、菌を死滅させることができます。*



講演②

家畜、ペット、食品を介して広がる耐性菌

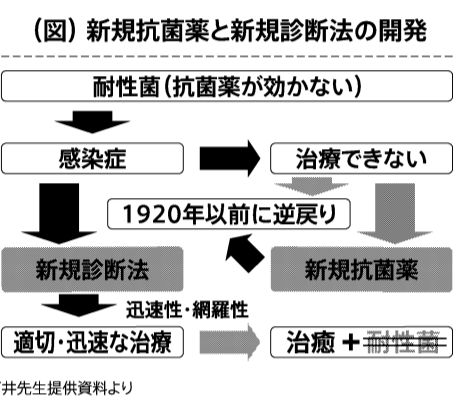
東北医科薬科大学薬学部臨床感染症学教室 教授 藤村茂 先生

耐性菌は人の体内で出現し人から人へと広がるだけでなく、家畜や食品から人へも広がっています。世界中の畜産業では、牛や豚、鶏などの家畜を病気から守るために、飼料として家畜用抗菌薬を大量に使用しています。そのため家畜の腸内には耐性菌だけが生き残るといった状態になってしまっています。耐性菌が家畜の腸内に存在するだけなら問題ありませんが、加工される段階で食肉に付着し、さらに、家畜の糞便が肥料として使われ作物にも付着

「悪夢の耐性菌」から子供・老人を守るために

新しい診断法、治療薬開発の必要性

講演③ 東邦大学医学部微生物・感染症学講座 感染症制御学分野 教授 石井良和 先生



間がかかることが問題です。そのため、培養を行わずに、あるいは短い培養時間で、迅速かつ網羅的に原因菌を検出する検査技術の開発が必要で、これまでのようにその薬を乱用してしまえば、容易に耐性菌は出現してしまいます。むやみに抗菌薬を使用するのはなく、原因菌に適した薬剤選択が迅速に行えれば、感染症を治癒させることができるだけでなく、耐性菌の蔓延、さらなる耐性菌の出現を抑制できると考えられます。

質疑応答

石井良和先生 大曲貴夫先生 館田一博先生 藤村茂先生

Q 人体に存在するあらゆる菌に耐性菌が発生しているのでしょうか。乳酸菌など体によいとされる菌も耐性化しているのでしょうか。

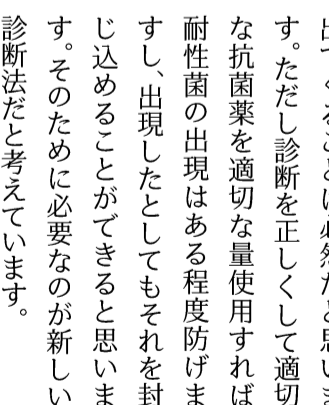
A 大曲先生 人の体の中には数えきれないほどの菌が存在していますが、その多くは耐性菌は出現していると思いません。乳酸菌など、人体によい作用を及ぼす菌ではわざと抗菌薬を効きにくくして体内へ届けるという技術も開発されていますので、それも一種の耐性菌といえます。

Q ペットから「悪夢の耐性菌」が検出されているということですが、感染を防ぐためには糞や尿などいどのようにするのがいいのでしょうか。消毒なども必要でしょうか。

A 藤村先生 消毒までは必要ありませんが、動物の糞、尿に関しては、直接接触を避けることが大切です。高齢で持病を持っているような免疫力の低い方では使用の手袋を使うなど必要だと思います。それよりも危険な行為だと思えるのはペットに口周りを舐めさせることです。ペットの口腔内にも人とは違う菌を持っているので気を付けてほしいと思います。人とペットの距離はきちんとしておくことが大事なのではないかと私は思っています。

Q 新しい抗菌薬が出てもすぐに耐性菌が出て、さらに新薬が出てと菌と新薬の追いつかなくなっているのではないのでしょうか。

A 石井先生 どんな抗菌薬を作ってもそれに対する耐性菌が出てくることは必然だと思います。ただし診断を正しくして適切な抗菌薬を適切な量使用すれば耐性菌の出現はある程度防げますし、出現したとしてもそれを封じ込めることができると思います。そのために必要なのが新しい診断法だと考えています。



効くはずの抗菌薬が効かない耐性菌が多く検出されており、知らない間に身近に広がっています。特に感染抵抗力の弱い子供や高齢者を、そのような耐性菌から守るためにはどうしたらよいかということ、本日の講座を企画しました。

閉会の挨拶

渡辺彰 先生

右記のURLへアクセスしていただけますと、市民公開講座を動画でもご覧いただけます。 <http://www.chemotherapy.or.jp/>

主催：公益社団法人 日本化学療法学会

後援：厚生労働省、公益社団法人 日本医師会、一般社団法人 日本感染症学会、一般社団法人 日本環境感染学会、一般社団法人 日本臨床微生物学会